交通問題勉強会だより　第７回

中部産業遺産研究会編著　風媒社『ものづくり中部の革新者』と交通論講義

『ものづくり中部の革新者』は、総ページ数355ページに及ぶ大部の本である。そして、登場人物たち113名の生涯と仕事について「人物事典風」（同書344P「おわりに」）に書かれている。各項目には小年表もつけられており「事典」として活用するには便利だ。でも、全体を「読み物」として読了するには一定の忍耐力を必要とする。

では、なぜ、今回の「交通問題勉強会だより」でこの本を紹介するのか？それは、面白かったから！そう、久しぶりに人の思いや考え方、その人を取り巻く人間関係など人の顔が見える技術史を勉強したから。そして、昔、社会科学系学部で行っていた「歴史・理論・現状分析（政策）」で構成した交通論講義を思い出したから。

特に、産業革命によって交通革命が可能となり、交通革命によって蒸気船や蒸気鉄道の運行が可能となり、資本主義の発展が可能となった歴史的展開にはワクワクしながら講義したものだ。蒸気機関の発明によって、人間の移動が風や水、馬などの自然力から解放されて、人間の意志で自由に（大量・迅速・規則的に）行えるようになったこと。これを可能にしたのは、人間のあくなき好奇心や探求心。そして、人やモノの移動の自由は、生産力の増大による大量の原料や製品の輸送、土地から切り離された「自由」な労働者の移動のために必要とされたから。この「自由」な労働者は土地という生産手段から切り離されたという意味で「自由」なだけで、資本・賃労働関係の中で新たな「不自由」と出会うことになる。つまり、生産関係（人間関係）だ。しかし、交通革命とりわけ鉄道の登場は、市場メカニズムの中とはいえ、人々に移動の自由を保障することとなる。払った金額ごとに等級の違いはあれども、乗車券を購入しさえすれば、移動の権利は誰にも平等に与えられる。原田勝正氏によれば、ここにおいて、「移動の権利という近代社会における基本的人権が実現」したのである（原田勝正『鉄道と近代化』、吉川弘文館、1ページ）。

さてさて、『ものづくり中部の革新者』そのものの話にもどろう。この本は、「ものづくり中部」というタイトルのジグソーパズルだと思えばいい。本の中にちりばめられたピースを組み立てていけば、「ものづくり中部」の形成過程が浮かび上がってくる。それらピースは、人物伝として語られる起業家精神、失敗にめげない粘り強さ、開発された新技術のすばらしさとそれらが呼応しあっていく様、事業展開に必要な環境整備などである。

また、通常の産業遺産研究は、産業革命期以降の工業発展を対象とするものが多いが、本書は日本の産業革命（通常、1886年から1907年の期間と言われている）以前の時代から2000年代初頭までにわたる長いスパンを研究対象としている。その意味も、このシズソーパズルを仕上げれば見えてくる。

知識と想像力を駆使しながら、ぜひとも謎解きをお楽しみいただきたいと思う。

（文責：森田優己）